春期福音特別集会（第1回）

恩恵と真理
――ヨハネ伝1、2、3、4章他――

1975年3月22日
小池辰雄

使徒ヨハネ　夢現　現象即本体　神の根源語の響き　恩恵の土台は十字架の贖罪　永遠の生命
極限情況　悔改と御霊のバプテスマ　生ける真理　神のデモクラシー　キリストの御懐　一極
絶対　絶対無条件の恩寵の中

【ヨハネ1】

1 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。……
14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に
父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。……
17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストにより
て来れるなり。18 未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡にいます独子の神のみ
之を顕し給えり。……
29 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これ
ぞ世の罪を除く神の羔羊。

【ヨハネ2】

1 三日めにガリラヤのカナに婚礼ありて、イエスの母そこに居り、2 イエス
も弟子たちと共に婚礼に招かれ給う。3 葡萄酒つきたれば、母、イエスに言う
『かれらに葡萄酒なし』4 イエス言い給う『おんなよ、我と汝となにの関係あ
らんや、我が時は未だ来らず』5 母、僕どもに『何にても其の命ずる如くせよ』
と言いおく。6 彼処にユダヤ人の潔の例にしたがいて四五斗入りの石甕六個
ならべあり。7 イエス僕に『水を甕に満せ』といい給えば、口まで満す。8 ま
た言い給う『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆけ』すなわち持ちゆけり。9 饗宴
長、葡萄酒になりたる水を嘗めて、その何処より来りしかを知らざれば（水
を汲みし僕どもは知れり）新郎を呼びて言う、10 『おおよそ人は先ずよき葡萄
酒を出し、酔のまわる頃おい劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今まで
留め置きたり』11 イエス此の第一の徴をガリラヤのカナにて行い、その栄光
を顕し給いたれば、弟子たち彼を信じたり。

【ヨハネ3】

1ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。
2夜イエスの許に来りて言う『ラビ、我らは汝の神より来る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』3イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず』4ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争で生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生まることを得んや』5イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず。…13天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。14モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。15すべて信ずる者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』

16それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。

【ヨハネ4】

46イエス復ガリラヤのカナに往き給う、ここは前に水を葡萄酒になし給いし処なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、47イエスのユダヤよりガリラヤに来り給えるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、その子を医し給わんことを請う、子は死ぬばかりなりしなり。48ここにイエス言い給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』49近臣いう『主よ、わが子の死なぬ間にくだり給え』50イエス言い給う『かえれ、汝の子は生くるなり』

【ヨハネ10】

9我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を得べし。

【ヨハネ12】

32我もし地より挙げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん。

【ヨハネ14】

6イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。』……

16われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17これは真理の御霊なり、

【ヨハネ18】

33爰にピラトまた官邸に入り、イエスを呼び出して言う『なんじはユダヤ人の王なるか』34イエス答え給う『これは汝おのれより言うか、将わが事を人の汝に告げたるか』35ピラト答う『我はユダヤ人ならんや、汝の国人・祭

司長ら汝を我に付したり、汝なにを為ししぞ』[36] イエス答え給う『わが国はこの世のものならず、若し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦いしならん。然れど我が国は此の世よりのものならず』[37] 爰にピラト言う『されば汝は王なるか』イエス答え給う『われの王たることは汝の言えるごとし。我は之がために生まれ、之がために世に来れり、即ち真理につきて証せん為なり。凡て真理に属する者は我が声をきく』[38] ピラト言う『真理とは何ぞ』

●使徒ヨハネ

よくいらっしゃいました。去年はペテロのお話をしたので今年はヨハネにするかな、ということで――来年はパウロなりそうです――ヨハネを選んだわけです。2回くらいの集会ではどうにもならない。それでどういうことになるか分かりませんが。

ペテロとかパウロというのは、生涯の活動の具合がわりあいにはっきりしている。特にパウロさんはそうです。ヨハネというのは、雲をつかむようで、これがヨハネでございというわけにいかない。しかし、あらましのことは、外側の概略のことはちょっと始めに当っておきましょう。

ご承知のとおり、「ゼベタイの子」でありまして、使徒のヤコブと兄弟――ヤコブが多分、兄さんでしょう――ヨハネ福音書とかヨハネの手紙、黙示録が果たして使徒ヨハネのものであるかということは学問上、問題があるわけですが、大体、使徒のものと、伝統的な古い解釈によってそうしておいて結構ですが。しかし、使徒ヨハネのものでないにしても、非常に使徒ヨハネの息吹がかかっている、その精神が盛られている、ということにおいては間違いがないと思うわけです。

使徒ヨハネはガリラヤの出身です。ガリラヤ人というのは大体、非常に情熱的であって、また勇敢であったということが言われているわけです。南の方のユダヤ地方の人にくらべて、北の方は素朴で純情型であるということが言えるかと思います。イスカリオテのユダというのがやはりガリラヤ人ではない。弟子は大体、ガリラヤ系統なんですが、ユダが異系であって、ついに反逆してしまった。

ヨハネはガリラヤ湖畔の一漁村に育って、多分それはベッサイダであろう、あるいはカペルナウムであろうといわれますが。父はゼベタイという、もちろん漁夫です（マルコ伝1章）。母の名前はサロメといったわけなので、一説によると、イエスの母マリヤの姉妹にしてもないにしても、多少、近親関係であるように思われます。兄弟ヤコブは使徒でありまして、ヘロデ・アグリッパにこのヤコブは殺された（使徒行伝12・1～2）。即ち、使徒の最初の殉教者がこのヨハネの兄弟ヤコブであったということは忘れてはならないことだと思います。

使徒ヨハネは初めバプテスマのヨハネの弟子であった。けれども、バプテスマのヨハネ

が殺害されました。これはイエスにとって非常に重大な事件であったわけです。イエスが荒野でサタンとの一騎討ちで勝たれて、それから、この使徒ヨハネはイエスの弟子となったということになったと思われます。彼はやはり文字通り一切を投げ棄ててキリストの弟子となった（ルカ5）。

しかも、使徒ヨハネが特にイエスの特愛の弟子であった。

「その胸に寄り添う」

というようなことが書いてある。特にイエスとは親しかった。もちろん、イエスという方は分け隔てをする方ではありませんが、人間の型としてヨハネがそういったことで、近かったということは言えるかと思います。

福音書をみると、「ペテロ、ヨハネ、ヤコブ」という三人が一番近しい直弟子でありました。特に先頭に立っているのがペテロ。イエスと一番問答して、躓いたり転んだりしているのがこのペテロです。ヨハネはむしろペテロの脇役みたいなもので、使徒行伝においてもペテロが先に何かしますと、ヨハネはその傍らにいてあまりものは言わない。ヨハネというのは多少、無口であったらしい。そういう、キリストの近くにはべってはいるけれども、あまりものは言わない。しかしながら、ものは言わないけれども、内側には熱はこもっている。そこで、「ボアネルゲ」「雷の子」なんていわれる綽名をつけられるような始末でありました（マルコ3）。

山上の変貌のとき、それからゲッセマネの祈りのとき、やはりこの三人はいました。けれども、ゲッセマネの祈りのときは三人とも眠ってしまった。もちろん、最後の晩餐のときも、ヨハネは非常にキリストの脇に座っていたようです。また、十字架にキリストがかかったときに、即ち、母マリヤの傍らにやはりヨハネはいたとみえて、そこで、

「これはお前の母だ。これはお前の子だ」

というような十字架上の言葉がありますが。その点でも、非常にイエスにいつも引っついていたということは事実であるようですね。復活の朝のときも、ペテロは非常に早く走っていくが、ヨハネはその後から行くというようなわけで、やはりその点でも脇役ということが大体のその姿です。

ルカ伝をみますと、イエスを拒んだサマリヤの村に天から火を呼ぼうかと言ったのが実にこのヨハネなんで、その点におきましても、

「天から火を呼ぶ」

なんていうなかなか激しいところがヨハネにはあったということも、それでも分かるわけです。

それから、使徒行伝はもちろんペテロとパウロが全面に出てますが、しかし、ヨハネは長生きをしまして、晩年には小アジアのエペソ――エペソを中心とした小アジアの諸々の教会は、黙示録にもありますが、これはもともとパウロが建てたわけですが――ヨハネが

そのエペソにだいぶ長く居ました。パウロが死んだのは紀元60年から65年の間です。パウロ、テモテ、テトスなんていうのがあいついで倒れたようです。紀元70年にはエルサレムが陥落し、そして、この福音の中心は小アジア、特にエペソにあった。そして、エペソにおいての中心人物がこのヨハネであった。もし、このヨハネが書いたとするならば、福音書や書簡は多分エペソにおいて書かれたということが言えるかと思います。

ドミティアヌス帝の15年に彼はパトモスに流された。このパトモスにおいて黙示にあずかって、聖書の最後のあの黙示録を書いた。これは本当に神の摂理です。この黙示録がなかったら、本当に画竜点睛を欠くというわけになりましょうが、実に黙示録は我々の偉大なる最後の希望がこの黙示録にかかっているわけです。ヨハネが黙示録を書かせられたということは、ある意味において掛け替えのない、他のものと比較することのできない重要な役割を果たしたと言うことができると思います。多分、紀元100年前後、ヨハネは静かに天界に往った。ポリカルトスとか、パティアスとか、イグナティウスというのは有名な殉教者、初代のキリスト教徒ですが、これはヨハネの弟子です。大体、ヨハネの姿はそういうものかと思われます。

●夢現

我々は、この集会において何もそういうヨハネというものをどうのこうのと言うわけではないので、そのヨハネが、またヨハネ精神の盛られているところのヨハネ福音書――と言いましても、この福音書をこの2回でするのはどうにもならない。私はお手上げでございますが――その中から今日は、何も解説をするわけではない、行き当たりばったり式にまずヨハネ伝のある一つのことを中心にしてお話しようか思っているわけです。

第1章を開いていただきましょう。

「1**太初（はじめ）に言（ことば）あり、言は神と偕（とも）にあり、言は神なりき。**」（ヨハネ1・1）

という有名な言葉です。「太初（はじめ）に」と言っても、何が「はじめ」だか分からないわけですね。仏教では「無始無終」というようなことを言います。ところが、この福音の世界は、聖書の世界は、

「我は初めなり終りなり」

とキリストも言われる。

「我は初めにして終りである」

と。神さまは始めと終りを持っておられるということが、これは神が創造主であるということです。神さまは創造主でありたもうがゆえに始めがあって終りがある。そうでない仏教的なものは、創造という概念が仏教にはありませんから、それで歴史的概念が出てこないわけです。そこで無始無終ということになる。

この神なる永遠者が始めと終りを持っている。ですから、この「はじめに」というのは、

この創造のはじめにおいて。そういう意味において、非常に私たちの歴史は、また私たちの生涯は、目的を持っている。「終り」ということは、目的ということ、目的があるということです。単におしまいなんていうのではない。大目的がある。

私はこないだの高等学校の卒業式で、

「とにかく、夢を持て」

と言った。今頃の青年はあまりに現実主義で、

「どうやっていけば食っていけるか」

なんてすぐそういうような観念が先立つのが世の趨勢（すうせい）かとも思いますが。私の藤井先生は

「真理に生きて、もし餓死するなら餓死したっていいじゃないか」

と言われました。目的を、夢を持つ。夢のないものは青年でない。また、本当の人間は、我々クリスチャンは、特に偉大な夢を持つ。言葉の一番深い意味において、まさに夢想家です。ということは、神の新天新地、黙示録の最後に書かれているそういった神の国に対するところの偉大な夢。これを「終末観」なんていう言葉で神学的にいいますけれども、むしろあれは夢と言った方がいいかもしれない。しかしながら、この夢は消える夢ではなくて、実現する夢です。

「夢か現（うつつ）か」

というが、この夢は即ち現となる。この夢は幻ではない。夢は現となる。こういう「夢現」なんていう表現は今日初めて書く。夢即現という。我々にとって夢は現であるというのは、

「我は始めにして終りである」

というこのキリストにより頼むから、このキリストの本願が私たちに、夢が即ち現となることを既に与えている。これが希望なんです。私たちが夢現を持つということは本当の希望を持っているということです。この現は必ず実現するんです。

●現象即本体

始めにして終りということ。だから、「初めに言あり」というのはそうわけです。この「言」は言霊（ことだま）です。聖書では、言と霊を別けてはダメです。霊言、言霊、これは一如です。聖書における言は必ず霊である。聖書における霊は必ず言である。言は霊の現象面、霊はその奥の面。本体面が霊であって、現象面が言である。キリストは神さまの現象面なんです。即ち、キリストは現象体なんです。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。現象即本体。本体と現象がズレがないんです、このキリストという実存は。我々はズレていますけれどもね。ズレていたって心配はいらんですよ。この信仰の世界は心配が一番わるいんですから。

「太初（はじめ）に言（ことば）あり」

ときたら、もうこれだけでもってグッとこなくてはいかん。そしたら、

「終りに言あり」

と響いてこなくてはいかん。

「**言は神と偕にあり、言は神なりき**。」

と。この霊言は即ち神と偕にあり、あるいは神に対してありと。神と面と向かってある。そして、言は即ち神であった。神性を持っていた。この「言」「ロゴス」という事態が「光」であり、「生命」である。あとには「真理」であるということになってくる。この生命はもちろん霊生です。霊光なんです。みんな霊がつく。

「**我は光なり**」

と、キリストは言われた。「私は光である」と。楽しいですね、そういうことが言えるようになったら。ところが、私たちは言わされている。

「**お前たちは世の光である**」

と。もう少し修養したら光になるぞ、なんていうことをキリストは言わない。「お前たちは世の光である」という。どうしてキリストはそういうことを言うんですか、私たちみたいなしょうがない者に。イエスという人は決して条件付きでものを言わないで、断言して言う。この世の学者は非常に条件を付けますけれども。「こうであろう」とか、「こういう場合には、こうなるであろう」なんて。キリストは私たちに向かって、

「**汝らは世の光である**」

と言われる。キリストが私たちに「汝ら」とか「汝」と言われるときには、力がかかっているんだ。力がかからないで、実力の裏付けなしに、キリストはそういう空言は仰らない。キリストに「お前」と言われたら、もうそれでもって救われてしまうんですよ。「彼は」なんて三人称で言われているうちはダメです。二人称で「お前」と言われるときに、これはもう上から実力がかかってくる。そして、キリストから「汝」と言われたらもう、キリストの中に吸い込まれる。12章32節に、

「[32]**我もし地より挙げられなば、凡(すべ)ての人をわが許(もと)に引きよせん**」（ヨハネ12・32）

と書いてある。キリストは吸引力を持っているんです。磁石、磁極みたいなものです。キリストに呼ばれたらもう、磁性がかかってきて、キリストに吸い付けられる。

「そうでしょうか」

なんていう顔している人があるよ。

「はい」

と言って、喜んでいる顔してなければいかん（笑）。どうも、都会人というのはすぐ頭で考える。私みたいにバカにならなければダメですよ、みんな。あまりみんな頭がよすぎる。大愚にならなければ。私は本当にバカなんですよ。だから、いつか三越でコンピュータの

姓名判断をしたら、
「あなたは人にだまかれやすい」
と出てきた（笑）。
「だまかされる者は幸いなり」
という。キリストは多分そう仰ってくださるでしょう。

●神の根源語の響き

キリストの言には実力の裏付けがありますから、どんなに不可能なことを言われても、キリストがそれを可能にする。そう読んでいかなければ、福音書は読めないんです。あまり凄い言で満ちているから。これを自力でやろうなんてしたって、一生懸命で修養してやろうとしたって、それはダメですよ。やれる人はやってくださいよ。私はもう自分が落第生だから、よく知っているから。それで、キリストの中にそのまま入っていくのが一番近いんです、道が。

そういう、キリストが神の言。「言」というのはただいわゆる言葉ではないですよ。さっきから申し上げているとおり、これは現象面ですから。キリストは神の現象面ですから、それが光ともなり、生命ともなる。神の生命としても現れ、神の光としても現れ、神の愛としても現れるわけです。これがみんな「言」なんです。本当の言は、言に絶するところの言なんです。絶言の言という。絶言の言とは何かというと、これは行為なんです。行為がもっとも激しい言なんです。

「十字架の言」

とパウロが言いましたが、十字架というこの行為は、キリストが十字架されたという、自ら十字架にかかったという、この行為は最ももの凄い言なんです。これ以上の言はない。だから、十字架を説明しようとしたって、説明なんかできるものではない。

そういう気合で聖書を読んでください。聖書は何が書いてあるのかと、意味なんかは要らないんです。響きを受けとるんです。聖書の御言をズバリ、その響きを、響きは奥から響いてきますから。ギリシア語でもヘブライ語でもないんだ。その奥から神の根源語が響いてくる。根源の響きを受けとる。

そして、聖書は、一番深い意味において、行為の世界ですから。神の行為ですよ、私たちの行為ではない。神の行為です。狭い意味においては、神の言です。即ち、聖書は全部、言だもの。けれども、聖書という神の言は同時に、行為をもって裏付けられている言なんです。だから、言と行とは聖書においては一つだから、聖書は言行渾然たるドラマである。そのドラマの中に自分を投じて読むことが聖書を読む秘訣なんです。

「聖書の読み方」なんていう本がたくさんあるけれども、あれはみんなダメだ。私は御霊における権威でものを言っているんですからね。これを身読（しんどく）という。私はこれだけしゃべっ

ていて、もう内側から火が燃えていて困るんです。

●恩恵の土台は十字架の贖罪

1章14節に、

「4**言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子（ひとりご）の栄光にして恩恵（めぐみ）と真理（まこと）とにて満てり。**」（ヨハネ1・14）

という、このヨハネ伝1章14節はヨハネ伝の中でもきわめて大事な言です。

キリストは神さまと一緒に天界におられた。そして、諸々のものはキリストを通して造られたと最初の方に書いてある。神と共に創造にあずかったキリストですが、その天界のキリストが今度は地上にイエスとして現れた。

「我はアブラハムより先に在りしなり」

と、キリストは自ら言われた。アブラハムより先どころのさわぎではない。世の創造の先からだから。そして、地上にナザレのイエスとして現れた。

「肉体となった」

というのは、私たちと同じ弱き相対的存在となられたということです。眠りもし、ご飯も食べ、泣きも笑いもした。いろいろな誘惑にもかかる危機性を持っていた。キリストは危機的存在となったということ。

「我らのうちに宿った」

というのは「幕屋を張った」という字ですけれども。パウロは肉体のことを「幕屋」とも言いました。旧約には、「天幕なる幕屋」なんていう言い方もある。我々の間に幕屋を張って、幕屋的存在となって、

「我らはそこに神の栄光を見た」

と。同じ危機的存在だけれども、これは神の現象体であるので、はっきりとそこに次元の違ったところの素晴らしい神的なものが現れているわけです。

それで、これは

「恩恵（めぐみ）と真理（まこと）とにて満ちていた」

という。「恩恵と真理」という言い方は旧約にもある。詩篇の中にも、申命記にも。ところで、今はっきり申し上げますが、「恩恵と真理」とは一体何だと。恩恵は、1章29節に、

「29**明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊（こひつじ）。』**」（ヨハネ1・29）

とある。「ホ　アグヌス　トゥー　テウー」（神の羔羊（こひつじ））というんですが、

「世の罪を除く神の羔羊」

という不思議な言葉を洗礼のヨハネが言っている。「羔（こひつじ）」という字は今の活字にはなかなかないので、植工が

「一体何だ、これは？　羊羹みたいだが違う」なんてね（笑）。これは言うまでもなく、旧約の宗教において、当歳の疵なき羔を屠って、大祭司が年一回、贖罪の行事をやるわけです。ヘブル書の9～11章あたりに出ている。即ち、贖罪ということが、罪の贖いということが、贖罪者がこの「羔」の表現で言われているわけです。だから、「世の罪を除く神の羔羊」という。即ち、羔羊の犠牲によって罪が赦される。罪の赦しは羔の犠牲による。これは旧約の宗教です。それをアウフヘーベンしてしまった。キリストはそれを満たしてしまった。即ち、彼自身が羔となる。これはヨハネ黙示録にも出てくる。

「羔の怒り」

なんていう言葉がある。羔が贖罪者ですから。贖罪の主ですから。

我々は神さまの前には罪びとにすぎない。

「罪の価は死なり」

というわけで、もしこのままだったら、みんな滅ぼされる。けれども、キリストが、

「よろしい。私が全部、引き受けた」

というのが十字架ですから。ヨハネ伝には、なるほど「十字架」という言葉が出てこない。たまにはあるかもしれない。けれども、この「羔」ということの中に、その十字架における贖罪のことがちゃんと出ている。これが罪の赦し、これが恩恵の土台です。

「恩恵と真理とに満てり」

というこの「恩恵」の土台がこの十字架の贖罪である。

●永遠の生命

妙なことが3章13節に出ている。

「13**天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。14モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。15すべて信ずる者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』**（ヨハネ3・13～15）

「人の子もまた必ず挙げらるべし」

というのは、キリストは、羔は必ず十字架に挙げられるということです。モーセの故事をそこに持ってきたわけです。

贖罪のことがまず恵みの土台である。その次は、ヨハネ伝をみると、「永遠の生命」という言葉がよく出ている。

「16**それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。**」（ヨハネ3・16）

と。ヨハネ伝では、「天国」とか「神の国」とかいうかわりに「永遠の生命」ということを言う。永生。天国とか神の国とかいうのは場所的な言葉ですね。神の意志の支配するところ。

神の御意の行われるところ。それが「天国」です。そして、神と共に生きる事態、そういった実存の方面の事態を表して、「永遠の生命」という。イエスは即ち天国体であり、天国体は永遠の生命を持っているので、即ち、永遠の生命を得るというのは、キリストと同じ生命を得る。もっと端的にいえば、キリストを得るというわけだ。

十字架と永遠の生命、復活の生命。キリストはなぜ復活したかというと、永遠の生命を持っているから、甦らざるをえないんです。永遠の生命を持っている者が十字架の贖罪をとげたあと、この永遠の生命の実を顕さざるをえない。キリストが復活することほど当然なことはない。

「どのような復活をしたのでしょうか？」

なんて調べたってしょうがない。昔は、神学者や聖書注解者はそういう様子ばっかり考えている。様子なんかどうでもいいですよ。その奥の世界は、もうキリストは甦らざるをえない。今もなお天界にあらざるをえない。今もなお生きたもうキリストである。その生命にあずからせてくださるというのが、これが恩恵の第二です。

罪からの解放です。もう少し言いますと、

「そう言ったって、なかなかしょうがないではないですか」

と。私もしょうがない。私も相変わらず死にいたるまでダメな野郎ですよ、きっと。けれども、ダメなやつの奥にダメでないものがどんどんと伸びている。躓（つまず）いても転（ころ）んでも滑っても倒れても、前進してやまないものがある。私は失望ということを持たない。失望だとか絶望だとかいうのは持たない。クリスチャンは、失望や絶望はいらない。まぁ、感情的にはね、

「あっ、しまった」

とか、

「しゃくにさわった」

とかいろいろあるかもしれません。けれども、そんなものはすぐ乗り越えてしまう。そんな移りゆく雲みたいなものはどうでもいいんだ。もうひとつ成層圏にいるから。雲海は下の方だ。私たちは成層圏の光の中、雲のなき世界をキリストの恩恵によって動いているわけだ。何も問題がない。全然明るい。相対的な自分なんてものは問題にしたって始まらないんだ、そんなものは。もう一つ奥の世界です。そこには本当に永遠の生命が、光が、死んでも死なない生命が動いている。

だから、十字架の贖いというものは、もうこれほど有り難いものはない。それは親鸞の『歎異抄』も素晴らしいけれども、しかし、このキリストの福音は何といっても本当の実質を持っていますから。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」

と。パウロさんと同じです。キリストがヨハネ伝の中で、

「私を受けとる者は死んでも死なない」

と言っておられる。これが恩恵の第二です。恩恵の第三は何か。言うまでもなく、御霊（みたま）です。

福音書は、マタイ伝はキリストの言が非常に整って伝えられている。ルカ伝はキリストの心の世界が非常に文学的にまた情緒豊かに書かれている。マルコ伝は行為面が劇的に描かれている。ヨハネ伝は霊の世界です。キリストの霊の世界が音楽的に響いているわけです。比喩的に大雑把に表現すると、マタイ伝は文学的、ルカ伝は絵画的、マルコ伝は彫刻的、ヨハネ伝は音楽的とでも言いますかね。どれももちろん霊ですけれども、ヨハネ伝は最も深く霊的な消息が描かれている。ヨハネ伝3章、4章あたりは特にそのことが深く出てくるわけです。

恩恵というところで、御霊の事態が4章にキリストがサマリヤの女と井戸端会話をするところがある。

「この水を飲む者はもう渇くことがない」

と。その「水」は、キリストは実は聖霊のことを言っておられた。2章にも水が出てくる。カナの婚姻のところです。

「[1]三日めにガリラヤのカナに婚礼ありて、イエスの母そこに居り、[2]イエスも弟子たちと共に婚礼に招かれ給う。[3]葡萄酒つきたれば、母、イエスに言う『かれらに葡萄酒なし』

葡萄酒がなくなってしまって、何とかしてくれと言ったら、

[4]イエス言い給う『おんなよ、我と汝となにの関係（かかわり）あらんや、

お母さんにむかって「女よ」なんて言っている。ギリシア語でいうと、

「何が私にそしてお前に、女よ」

という言い方なんです。そういう非常に簡単な言い方なんです。

「私にとって、お前にとって、何だね、女よ」

というような言い方です。

我が時は未だ来らず』

「時」というのは非常に大事な言葉ですけれども。

[5]母、僕どもに『何にても其の命ずる如くせよ』と言いおく。[6]彼処（かしこ）にユダヤ人の潔（きよめ）の例にしたがいて四五斗入りの石甕（いしがめ）六個ならべあり。[7]イエス僕に『水を甕に満たせ』といい給えば、口まで満たす。[8]また言い給う『いま汲み取りて饗宴長（ふるまいがしら）に持ちゆけ』すなわち持ちゆけり。[9]饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗（な）めて、その何処より来（きた）りしかを知らざれば（水を汲みし僕どもは知れり）新郎（はなむこ）を呼びて言う、[10]『おおよそ人は先ずよき葡萄酒を出し、酔（よい）のまわる頃おい劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』[11]イエス

此の第一の徴をガリラヤのカナにて行い、その栄光を顕し給いたれば、弟子たち彼を信じたり。」

石瓶に水を満たさせて、それを汲んできたら、その水が葡萄酒に変わっていた。聖霊は水に例えられ、また火に例えられる。あるいは風に例えられる。もともと霊という字は風という字ですからね。風とか息とか気とかいう。

●極限情況

これは第一の徴というのでね、第二の徴はどこに書いてあるかというと、ヨハネ伝4章に出ている。これはやはりガリラヤのカナです。今度は、死ぬばかりの病の子ども癒した。

「46**イエス復ガリラヤのカナに往き給う、ここは前に水を葡萄酒になし給いし処なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、47イエスのユダヤよりガリラヤに来り給えるを聞き、御許（みもと）にゆきてカペナウムに下り、その子を医（いや）し給わんことを請う、子は死ぬばかりなりしなり。48ここにイエス言い給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』49近臣いう『主よ、わが子の死なぬ間にくだり給え』50イエス言い給う『かえれ、汝の子は生くるなり』**（ヨハネ4・46～50）

と。この一言を発したら、もうその瞬間に、はるか何キロだかしらないけれども、その死にそうな子どもが生き返ってしまった。これが「第二の徴」だという。

一体、どういう時に徴は現れたんですか。片一方は、葡萄酒が尽きてしまった。片一方はもう瀕死の病である。極限情況です。皆さん、何も心配はいらんですよ、極限情況になった時に一番凄いことが顕れてくるから。この福音の世界は、我々の相対次元に絶するところに、上から切り込んでくる。「突破、突破」というけれども、上から突破してくるんです。上から破ってくるんですから。聖霊の降臨がそうじゃないですか。満願の時に、十日間祈っていたその十日目の満つる時に俄然、この霊が臨んできた。親鸞が法然にぶつかったときもそうです。あれも満願の時に示されて、法然上人にぶつかった。

即ち、十字架の贖いと永遠の生命、そして、この御霊の事態。この三つの事態が恩恵の内容です。

「恩恵と真理に満つる」

というそのキリストの恵みとは、キリストの十字架の贖罪の力と、永遠の生命と、キリストの御霊がやってくる。これ全キリストと言ってもいいくらいに、それが恵みの内容であると、私はヨハネ伝を読んでいて、そう思った。

●悔改と御霊のバプテスマ

今度は「風」の方ですけれども、3章のところでニコデモがイエスのところにやってきた。

「1**ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。**
2**夜イエスの許に来りて言う『ラビ、我らは汝の神より来る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』**
「あなたは大変、神さまの人だ」なんて、お世辞を言ってから、
3**イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の国を見ること能わず』**
見ることも入ることもできないというわけだ。
4**ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争で生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生まることを得んや』**
と、ばからしいことを言っている。
5**イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず。』**（ヨハネ3・1～5）
「水と霊」という、この「水」は悔改のバプテスマのことを言ってらっしゃるんでしょう。「霊」は聖霊のバプテスマです。即ち、悔改のバプテスマと御霊のバプテスマにあずからなければ、神の国に入ることができない。この水のバプテスマと霊のバプテスマは、キリストにおいては一つ。我々においても一つ。だから、私たちはいわゆる洗礼はしない。洗礼はしなくても、集会でもって神さまが、キリストがあなた方一人びとりに自由に御霊のバプテスマをなさいますから。
「悔改のバプテスマ」は十字架なんですよ、言い換えれば。十字架を本当に受けとれば、
「主さまは私の罪をすっかり背負ってくださった。あそこにもう全部、私は片づいている。私はもう無私の人間になった」
と。根底から、いわゆる私のない人間になりました。これを受けとらなかったら、この無私の現実を受けとらなかったらば、十字架を受けとっているとは言えないんです。相対的人間我々がどうであったって、そんなことは問題ではない。その奥。これは万人に共通な場です。無私という場。誰でもがこれを受けとれる。もうこれを受けとったら、俄然、ここに聖霊が来ますから。自分はもう本当にはずされている。相対的自分がどうであろうと、そんなことは問題でないということを本当に瞑想してごらん。祈って。それを本当に受けとるまでは、夜を徹してもいい。そうして、本当にぶっ倒れてごらん。それは聖霊がくるから。それくらいのことを一遍、命懸けでやらなくては。
十字架の贖罪という命題をいくら頭で信じたってダメですよ、わるいとは言わないけれども。それは観念信仰という。いつまでたっても、それでは本当の力はこない。魂の世界は論より証拠なんです。その人が本当に受けとっているか受けとってないかは、人の証明はいらない。自分ではっきり分かるんです。
「とにかく、私はもうそこで本当に違ったんです」

と、こう言えなくては。

「相対的な私をあなた方が何と非難しようといいよ。私はその奥の世界にいるんだ」

と、はっきり言えなければダメなんです。

無教会はあれだけ十字架を言っていて、なぜ、聖霊を受けとらなかったんだろうね。聖霊が接点くらいまで来ているかもしれないけれども、交わっていないんだよな。内村鑑三先生も時々、火花を散らせていたんだけれども。なぜ、内村先生を突破しないか。私が『曠野の愛』26号を書いた時に手島さんが

「小池さんは内村調、藤井調を突き抜けた」

と言ってくれた。私は無教会の主流に棹さしてきましたから、よく知っているんです。無教会の信仰のたちは、筋はいい。けれども、これは筋ばっかりでね、血が通ってない（笑）。

私は、相対的な人間小池は何と言われようと、びくともしない。その恩寵の世界に入ってしまったから。私はもし、この恩寵を言わなかったならば、この恵みを言わなかったなら、キリストを拒むことになるから。

●生ける真理

だから、恩恵という一つの言葉の中にそういう重厚な内容が入っています。今度は、「真理に満ちている」の、「真理」ということ。これはヨハネ伝14章6節に、

「6**イエス彼に言い給う『われは道なり、真理（まこと）なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。**」（ヨハネ14・6）

と。はっきり言ってますよ。富士山の頂上にはどこの道を通ったって行けるよ。ところが、父の御許にはキリストを通らなければ行けないんだ。マルチン・ルターを通ったってダメなんだ。パウロさんを通ってもダメなんだ。これはキリストを通らないと。パウロさんも、ヨハネさんも、ペテロさんも、これはみんなキリストを通って行ったんだから。キリスト道、キリストという門を、キリスト門を通って神さまの許へ行くんです。この門の中に十の字がある。これは福音的な門です。このキリスト門を通って我々は神さまのところに行く。これはヨハネ伝10章です。

「9**我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を得べし。**」（ヨハネ10・9）

「草を得べし」というのは、永遠の生命、御霊を得るということです。

「我は生命であり、真理であり、道である」

というのは、定冠詞がついているから、

「我こそはその道であり、その真理であり、神のただひとつの生命である」

ということ。神への道はキリスト道という。

「キリスト道という十字架門を通った神への道が即ち、真理であり生命である」

と。もうひとつ言うと、これは生ける真理なんです。キリストは生ける真理です。「真理」と言うと、普通我々はすぐ頭の方にくる。どういう項目があるかなんてね。だけれども、キリストというのは具体的な生ける真理ですから、もう生命が同時に真理である。またこれは「道理」と言ったっていい。本当の道理なんだ。

これは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を読んで、そこに盛られているところのキリストの言、キリストの行為、これは全部、真理なんです。真理の無限、多種多様な立体的、ドラマチックな表現なんです。だから、

「これは真理でござい」

なんていう説明はできない。キリストという真理が、もし説明できたと思ったら、そんな説明は間違いだ。説明を絶するところの、もう読んで、これはどういうのかというと、この真理は、私たちの身につけるまでは分からない。身に受けとるまでは。福音書の内実を身に受けとるまでは、キリストが真理であるということが分からん。

「真理とは何ぞや」

なんてやっているね、ヨハネ伝でも。18章でピラトとの問答のところで、

「[33]**爰**（ここ）**にピラトまた官邸に入り、イエスを呼び出して言う『なんじはユダヤ人の王なるか』**[34]**イエス答え給う『これは汝おのれより言うか、将**（はた）**わが事を人の汝に告げたるか』**[35]**ピラト答う『我はユダヤ人ならんや、汝の国人・祭司長ら汝を我に付**（わた）**したり、汝なにを為**（な）**ししぞ』**[36]**イエス答え給う『わが国はこの世のものならず、若**（も）**し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦いしならん。然れど我が国は此の世よりのものならず』**

あるいは、「この世からのものではない」と書いてありますが、

若（も）**し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦いしならん。然れど我が国は此の世よりのものならず』**[37]**爰にピラト言う『されば汝は王なるか』**

これが問題なんだね。

イエス答え給う『われの王たることは汝の言えるごとし。凡て真理に属する者は我が声をきく』[38]**ピラト言う『真理とは何ぞ』**（ヨハネ18・33～38）

なんて言ったものだから、これはもう国事犯、政治犯だと思われてしまうわけです。ローマにちゃんと王様がいるのにね。

我は之がために生れ、之がために世に来れり、即ち真理につきて証せん為なり。

これは辻褄があわないでしょ、論理が。王ならば即ち、「世を治めんがために」と言うならわかるけれども。キリストはそう言ってないんだ。

「即ち真理につきて証せん為なり」

と言った。王と真理となんの関係があるか。これは真理の王者なんです。キリストは真理の王者です。この現世は彼には問題じゃない。

「わが国はこの世のものではない」

と。霊界の王者、真理の王者です。霊界の王者、真理の王者が本当はこの世を本当に治めることができる人なんだ。全然逆説的なんですけれども。

●神のデモクラシー

今は、デモクラシー、民主主義と言うね。けれども、いつも私が言うとおり、民主の奥に神主（しんしゅ）がなければダメだと。神が主でなければ、そんな民主主義はダメだ。みんな大勢の人がいろいろ言うでしょ。多数決はいけない。それぞれの意見は充分に聞く。けれども、最後の断は真理の王者が決める。王者がはっきりと。みんなの意見をよく聞いてから。聞かないのではない。民主主義でみんなの意見をよく聞く。けれども、最後の断はこの真理の王者がくだす。即ち、「真理の御霊」とあるでしょ、14章16節に、

「16**われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。**17**これは真理の御霊なり、**」（ヨハネ14・16）

とある。聖霊は、キリストの霊は真理の御霊である。即ち、キリストの御霊であるというのと同じことです。生ける真理だから。だから、公正な判断は、それはこの聖霊の示しによってなされる。即ち、御意がそこに受けとられるわけです。

ただ、我々は人間だから、ときにその判断をあやまることもあるでしょう。しかし、とにかく一遍決めたら、やってみるさ。それで間違っていたら、かぶとを脱ぐさ。そしてまたやろうじゃないかと。人間の世界はそれでなければダメですよ。

「俺はこう思ったのに、ああ決めやがった。けしからん」

なんて、いつまでもやっていたら、いつまでたっても始まらない。決まったら、それに従う。従ってやってみたところが、どうもうまくない。

「それではまた考えましょう」

ということはありえます。けれども、やはり上に立つ人はそれだけの権威をもってやっていかなければ。

私はその権威をもってやってますよ、学校で。その権威がなかったら、私はいつでも校長なんか辞めるんだから。それは本当ですよ。多数決なんかで絶対に決めないから。みんなの意見をいろいろ聞く。それは一応、議長団で多数決もやっているよ。その多数決が結構なら、私は黙っている。結構でないときは、ひっくり返してしまう。普通の公立の校長さんは全然それができないらしいね。全然押されてしまって、ロボットみたいになっているらしい。お気の毒な話です。学校は人格共同体ですからね。労使関係の闘争関係ではありませんから。あの労使だって本当は人格共同体でなければいけないんですよ。組合のない会社というの

が一番素晴らしいんだ、本当は。社長さんに信頼している。それくらの信頼関係だったら楽しいよな。すべては人間の関係はそういった信頼関係、信愛関係です。今は間違っている。もう一遍、神のデモクラシーに戻らなくては。人的デモクラシーでなくて、神的デモクラシーに戻らなくてはいかん。

「真理」は即ち、もうひとつ別な言葉でいうと、神の御意の具現されたものが真理である。即ち、神の御意を具現しているもの、聖意体現しているもの。キリストは即ち、聖意体現者である。聖意体現者のその実存の世界、そこにこぼれているものが真理です。

福音書を読んで、

「私は真理なり」

と言われたら、黙って平伏すと一番よく分かる。

「どれが真理か」

なんてやっているうちはダメです。黙って平伏す。とにかく、キリストの前に平伏すまでは、この世界に入れない。恵みの中にも、真理の中にも入れない。

「恩恵と真理とに満てり」

というのは、この恩恵と真理に満ち満ちているところの、それ自体であるところのキリストに平伏しその中に突入していく。それに吸い付けられていく。これが本当の

「イエス・キリストは恩恵と真理とに満てり」

ということ。その「恩恵と真理」という内実はかくしてはっきりとしました。何となく「恩恵と真理」はありがたそうな顔したって、それはダメだよ。本当にありがたくならなくては。

●キリストの御懐

そこで、もう一つ、ヨハネ伝の1章17節、

「17律法（おきて）はモーセによりて与えられ、恩恵と真理（まこと）とはイエス・キリストによりて来れるなり。」

とあるでしょ。律法では人間はどうにもならん。旧約の世界ではどうにもならん。いくら預言者が出てきても。だけれども、律法の本当の精神は霊法であったんだけれども、この霊法として、律法を外側から破って、霊法を現じたのがイエス・キリストなんですから。いわゆるモーセの律法ではどうにもならん。今度は、

「イエス・キリストによって恩恵と真理とがやってきた」

と書いてある。キリストと一緒に。旧約にも「恩恵と真理」という言葉があるけれども、ダメなんだ。まだ中味が、次元が少しズレている。

18未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡（ふところ）にいます独子（ひとりご）の神のみ之を顕（あらわ）し給えり。」

（ヨハネ1・17～18）

と。まず何という言ですかね、この18節というのは。私は大好きな言なんです。イエスは

父の中にいた。旧約の預言者が

「エホバの中に」

とどこかに書いてあったら、教えてもらいたいな。多分ないはずです。この「の中」という世界、これははっきり、キリストが顕した。父の懐の中でキリストは祈っていたような人です。

「枕するところなし」

と言うけれども、到るところを枕にしていた。どこでだって彼は寝れます。それは父の懐の中に入ってしまうんだから。舟板の上でもこれは父の懐の中だから、嵐の中だって寝てしまう。絶対に舟は沈まないと。まぁ驚くべき人ですよ、正直。もう私はああいうところを読むと、楽しくてしょうがない。そして、海の上を渡ったりね、物理法則を乗り越えた。それはキリストの霊的次元なんていうものはとても大変なものですからね、復活のキリストがお魚を食べてみたりね。あれは物語ではないですよ、みな本当です。あれを笑う神学者たちがいたから、その群から私は出てしまった。一流の神学者だ。

「小池なんてのは大したことない」

なんて、みんな思っているかもしれない。神さまの尺度では、どちらが大したものだか知らんです。

まだ私たちは、聖書が呻いているところのもの凄い次元が読めてないんですよ。これは本当に祈って入っていかないと。聖書は、読むなんて、おおそれた話ではない。聖書は、祈りこまなければ、これは読めないんです、正直。祈り心で、この文字の奥の次元はどういうんだろうと言って、その中に自分を投げ入れていかないと。

そういう父の懐。「父」なんて言うと、すぐ躓く。

「どんなお父さんだろうか。それはおとぎ話ではないか」

と。それは、表現はおとぎ話みたいですよ、「父」なんて言ったら。そういう躓きの表現をして、実はものすごい次元の世界を表している。そうすると、聖書くらい楽しい本はなくなってくる。どんな小説も劇も、聖書は最大のドラマだから。シェイクスピアが何だかんだと言ったって、聖書にはかなわんですよ、この次元のもの凄さは。何といったって、これは神のドラマです。キリストが動いている四福音書なんていうものは大変なものだ。本当に傑作ですね。これは本当に書かしめられた本です。

そういう

「父の御懐（みふところ）」

ということ。今度は、私たちは

「キリストの御懐」

です。いきなり「父」なんていうわけにはいかないから。主さまです。主の御懐に。それは、キリストの御懐には入れるんです。さっきの十字架の門を通っていくんだから。十字架の

門を通らないでいきなり入ろうとしたって、これは無理ですよ。十字架の門を通っていく。十字架の門を通って、ちゃんと贖罪を受けとって、

「よしよし」

と。キリストは無条件にどんなやつでも、十字架の片一方の盗賊も、

「今日、お前は私と一緒にパラダイスだ」

と。砕けたら、すぐに。砕けの心です。平伏し砕けの心をもっていけば、キリストは直ちに入れてくださる。何のかんのと言っているうちはダメですよ、絶対に。イエス・キリストの十字架そのものが砕けの極致なんだから。

●一極絶対

そういう世界を一極絶対と言うんです。相対の世界ではない。善悪だとか、美醜だとか、清濁とか、正しいの正しくないの、美しいの美しくないの、何のかんのと、そういう品定めをしているうちは、いつまでたっても始まらない。人間の道徳の世界は、そこらでいいですよ。大いにそういうところも通らなくてはならないでしょう。けれども、もうひとつ奥の世界にいくと、

「直き者にも直からざる者にも雨を降らせ、日を照らす」

という世界がこの一極絶対という世界なんです。私が「無」と言うときに、「有」と相対的な無を言っているのではない。間違わないでくださいよ。無は有と対するような、そういった相対的な無ではないんです。絶対無というのはそんなものではない。あるいは、仏教的な言葉でいうと「空」と言ってもいい。

一極絶対のそういう事態にこの恵みの世界では入れるんです。恵みへ入るのに何の品定めはいらない。無条件です。分裂しているなら分裂のまま、頑ななまま。気がふさいでいるのなら気がふさいでいるまんま。

「来たれ！」

というキリストのところに行ければいいんです。それだけなんです。それだけ。「私はこういう状態だからダメです」なんてことはひとつもない。それは恵みを拒むことなる。

「どんな状態であっても、いや悪ければ悪いほど結構だ」

とキリストは仰る。本当だよ、それは。

「お前はあまり良すぎるな。ちょっと待て」

なんて逆に言われるかもしれない。だから、立派な人はなかなか福音の世界に入れないんだよね。私みたいな破れ器が早く入ってしまう。それは本当ですよ。

私のお母さんというのは非常に立派なお母さんでしたからね。

「精神一到何事か成らざらん」

と、非常に奮闘のお母さんでした。私はもちろんお母さんのあれには感謝しております。

本当に孤軍奮闘しました。私は五つのときに父を亡くなして、あと五人の子どもを女学校の先生をして私たちを育ててくれた。非常な過労のためについに、兄が亡くなったときには、失望落胆と過労のために失明してしまった。でも、失明のあとで福音の世界に入ってくれましたけれども。それは本当に力闘の女性でした。だから、私はその点で母には申し訳ない子どもですけれども。けれども、この福音の世界に入って、このダメな野郎が何だかしらんけれども、とにかくキリストを証しすることになってしまった。

「病める者は医者を要す。罪びと我を要す」

という。パウロさんも、

「我は罪びとの首（かしら）なり」

と言って、キリストにしがみついた。でも、私はそんなに頑なでもない。非常にやさしいんです。けれども、相対的な人間的な砕けくらいではダメなので、イエス・キリストのこの砕けをいただいたら、そうしたら、もう本当にありがたいわけです。

そういった、相対的判断を絶したところが一極絶対の世界なんです。善というものに対して悪という極がないんです。悪、罪、暗さ、何だっていい。そいつに向かってもの凄い光がくる。それが一極絶対という。相対的な判断でだんだん善くなろうなんてのではない。忽然として善の世界に、光の世界に入れられてしまう。誰であろうとも。もうそれは今晩一晩で新しい人も、十年ボヤボヤしている人よりか先へ行ってしまう。本当ですよ。何も心配はいらん、

「福音とは難しい世界だ」

なんて。こんなやさしい世界はないんですよ。もの凄く易行道のものだから、かえって難しいというわけだ。ただし、易行道だけれども、易行道といってただいわゆる安易ではないですよ。自分を全部ぶちまけるというけれども、

「さて、そのぶちまけができないから、私はお前をぶちまいてしまっているぞ」

というのがこの十字架なんですから。これに気がついたら、イエス・キリストの十字架に気がついたら、もう自分の突入以上にもの凄い吸引力で引きつけられる。人間の側の突入如何にはまだ度合いがありますよ。その相対的な度合いに絶するんです、この十字架は。相対的な度合いに絶するのに俄然気がついたら、もう私は次の言葉は異言になりそうになる。そういうような事態がこの一極絶対というんです。相対でない。

●絶対無条件の恩寵の中

私たちはキリストの懐に、一極絶対の事態をもって、十字架を通って懐の中に吸い入れられていく。その現実は今、あなた方はちゃんと身についているはずなんです。気の世界を考えてごらん。気の世界、空気の世界を。プニューマ。大気。我々はこの空気に包まれている。逃げようとしたって――どこかへ逃げてごらん。地球からどこかへ行くなら知ら

ないけれども。そうでないかぎりは――この空気の世界からは逃げられない。我々はどこへ行こうが、空気の中にいる。また、空気を吸っている。これは絶対界なんです。空気という絶対界の中に私たちはいるのに、なぜ、キリストの恩寵の絶対界に入らないんですかと。身体は空気の絶対界の中で生きているのに、魂はなぜ、無条件にキリストが「来い」と仰るのに、行かないんですかと。

「もっと聖書を読んでから」

とか、

「もっと人のために尽くしてから」

とか、

「もっとギリシア語やヘブライ語が分かってから」

とか、冗談言うなと。ギリシア語のギの字も、ヘブライ語のへの字もいらん。いいですか。それだけの気合をもって聖書の世界にかかっていかなければ。どうも、無教会というのはすぐ「ギリシア語、ヘブライ語」なんて言うからね。私だってやっているけれども、そんなものは付けたりですよ。アクセサリーです。アクセサリーなんかいらないから。あなた方は日本語でいいから。それはまぁ、青年諸君は少しは勉強してくださいよね。けれども、そんなことは決して絶対の世界ではありません。二番目の塚本先生というのは語学ができるものだから、もうみんなにギリシア語やヘブライ語をやらさせた。私もヘブライ語のクラスをもたされて三年間ばかり教えたりしたよ。ご苦労さんな話だ。私はおそらく日本で最初にそういったクラスを持ったでしょうね。もうだいぶヘブライ語は忘れたけれども。この頃、日本語の方が私は好きになってしまったものだから。もう面倒くさくなってしまった。日本語は素晴らしい。世界最高の言葉ですから。私たちはいくらドイツ語をやったって、英語をやったって、たかが知れてますよ。

とにかく、そういう絶対無条件のキリストの恩寵の中にある。これが

「キリストの懐に入る」

ということ。懐に入ったならば、父の懐にキリストは在るが、私たちはキリストの懐の中に無条件に入れる。今言いましたように空気の中にある、キリストの懐の中にある、キリストの御腕の中にある。瞑想してくださいよ、夜、寂しくなくなるから。寂しくないどころではない。もうもの凄い熱さがくる。座っていて、世界中を飛び回るようなことになる。宇宙船よりかもっと凄い。私はもの凄い超現実の人間かね、知らんけれども。非常に当たり前の人間なんだけれども、そういうわけなんです。これが御霊の世界のありがたさなんです。

そういうことで、我々は行き詰まり知らんです。どういう現実においても本当に対処することができるわけです。